

ネットワーク型英語集中訓練プログラムにおける overachieverとunderachieverの研究

—アンケートによるリスニングプログラムの分析—

青 木 信 之

Overachievers and Underachievers in the Network-Based English Training Program

A Questionnaire Study Exploring the Difference with Respect to Listening Skills

Nobuyuki AOKI

広島市立大学国際学部
広島国際研究 第10巻（別冊）
2004年11月

Hiroshima Journal of International Studies Volume10
Faculty of International Studies
Hiroshima City University
November 2004

ネットワーク型英語集中訓練プログラムにおける overachieverとunderachieverの研究

—アンケートによるリスニングプログラムの分析—

青 木 信 之

Overachievers and Underachievers in the Network-Based English Training Program : A Questionnaire Study Exploring the Difference with Respect to Listening Skills

Nobuyuki AOKI

This study is one of a series of research projects that explore the differences between overachievers (OA) and underachievers (UA) in a network-based English training program called Intensive English Training on the Web (IETW). In this study, program participants' responses to the questionnaires conducted before and after the program were examined in order to find the factors that differentiate OAs and UAs in terms of their listening skill. The answers to the questionnaire given prior to the program revealed that OAs were more motivated than UAs to study English, and the post-program questionnaire found that OAs were more earnest than UAs in doing the exercises of the program. However, this study fails to pinpoint in what way OAs were more earnest; some result indicated that they had greater concentration on the exercises, and other results showed that they checked the script and translation of the listening questions more frequently. In order to accurately detect the secrets of OAs, further research is necessary with respect to their participation and performance in the program.

I. 研究背景

II. これまでのOAUA研究で明らかになったこと

III. 調 査

IV. 全体考察

V. 今後の課題

VI. 参考文献

VII. Appendixes

I. 研究背景

筆者が勤務する広島市立大学において、Intensive English Training Program on the Web (以下、IETW)を実施して7年になる。IETWとは、コンピュータネットワークを通じてリーディング問題やリスニン

グ問題、そして文法問題を大量に学習するという英語集中訓練プログラムである。受講者はIETWを約2ヶ月間受講し、その前後に受験するTOEICで英語力の向上を確かめる(これまでの実施と効果については、青木・渡辺 2000; 渡辺・青木 2001; 青木・渡辺 2002; 渡辺 2003を参照)。2001年度までは、IETWは大学内の課外プログラムとして希望者のみ

に実施されてきたが、飛躍的な学習効果がみられたことから、2002年度からは正規英語授業科目「CALL英語集中」(国際学部1年生必修科目)、「CALL英語総合」(情報科学部及び芸術学部1年生選択科目)として実施されることとなった。また、学外でも、広島市「まちづくり市民交流プラザ」において市民対象のプログラムとして実施されるようになった。

IETWの受講者は、約8週間、大学生は月曜日から金曜日までの毎日約1時間半、市民受講者の場合は週に2、3日、2時間ほどコンピュータの前で学習する。

これまでの実施データから、事後TOEICで得点かなり向上することがわかっている。本学学生の場合は、TOEICスコア平均が、受講前の約500点から8週間の受講で100点から120点ほど向上する。また、市民受講者の受講前スコアはもう少し高く550点から600点ほどであるが、それでも約100点の向上がある。

さて、このIETWでは受講者の英語力をより効率的に向上させるための様々な取り組みを行ってきた。例えば、リーディングプログラムでは、英文をフレーズごとに画面提示し、一文が表示されたところで消えるというフレーズリーディングプログラムを開発し、受講者の戻り読みを防ぐ試みを行った。また、英文を読ませる前に、キーワードやトピックセンテンスを提示し、受講者のスキーマを活性化させてから読ませる試みも行った。さらに、2ヶ月間の間に読ませる英文の長さを様々に変え、どの程度の長さの英文を読ませることが効果的か探ってみた。

また、リスニングでは問題音声聞く回数を変えたり、解答をすぐに提示せず、ヒントを与えることの効果を調べた。さらに解答後に音声のスクリプトや訳の提示がどういった効果を及ぼすのかといった点についても調査を行った(これらの調査実験結果については、青木・渡辺 2000; 渡辺・青木 2001; 青木・渡辺 2002を参照)。

学習者の英語力をより効率的に向上させるためのこういった方策は、すべてプログラム実施者側からの取り組みであった。しかし一方で、まったく同じプログラムを受講しても、大きく事後スコアを伸ばす者とそれほど変化のない者が存在している。もちろん、天井効果により事前スコアが異なれば、伸びが異なることは明らかになっている。例えば、受講前スコア帯が400から500の者は事後スコアが約130点向上するが、500点から600点のものは約110点、600点から700点の場合は約70点の向上となる。(青

木・渡辺 2000; 渡辺・青木 2001; 青木・渡辺 2002)。しかし、同じスコア帯から受講しても、事後スコアの伸びがまったく異なる学習者が存在するのである。このことは、学習者側の要因、つまりこれまでの英語学習経験や英語学習に対する信条の違い、また受講に対する取り組みなどが異なることから生じていると考えられる。

この伸びの違いを生み出す受講者側の要因、言い換えればoverachiever(以下OA)とunderachiever(以下UA)を決定する要因が、コントロールのできないものではなく、例えばプログラムに対する取り組み姿勢であることがわかれば、プログラム実施者側からのアプローチだけでなく、受講者の取り組み姿勢を変えさせることによって、英語力をより効率的に伸ばすことができるということを意味する。

このIETWでは、受講者の受講記録が様々な角度からサーバに保存されている。例えば、各受講者のプログラムアクセス日数やアクセス時間、リーディング学習プログラムで言えば、各英文に対するリーディング速度(wpm)、内容把握問題の正解率など、多くのデータがサーバに記録されている。また、プログラムの受講前及び受講後には必ずアンケートを実施し、プログラムに対する取り組みなどについて訊ねている。

こういった受講記録やアンケート資料を詳細に分析することにより、OAとUAを分ける受講者側の違いを明らかにしていくことができると考えている。本研究は、受講前後に実施するアンケートから、特にリスニングプログラムにおけるOAとUAの違いを探ることを目的としている。また、IETWのようなプログラミング学習において、最大限に効果を上げる学習者タイプを明らかにすることを、最終的な目標とする一連のOAU研究の一つでもある。

リーディングプログラムについても同様に、アンケート資料を用いた分析を行う予定であるが、紙面の関係上、本論ではリスニングプログラムでのOAとUAの違いをアンケート回答から明らかにしていく。

II. これまでのOAU研究で明らかになったこと

本節では、IETWにおけるこれまでのOAU研究を概観する。一般的にOAUの研究には、小学生の学力差などを解明しようとしたものが多く、ESLやEFLにおけるOAU研究や、本研究のようなプログラミング学習におけるOAとUAの違いを明らかにし

ようとした研究は、筆者の調べたところ、皆無であった。したがって、ここでは、筆者が行ってきた一連のOAUA研究についてみていくこととする。

青木(2004)では、リーディングプログラムにおけるOAUAを受講中データから分析している。2002年のIETW受講者であった大学1年生166名を対象に、リーディング課題におけるリーディング速度、内容把握問題正解率、そして正解率を掛け合わせたリーディング速度の点から、OAとUAの特徴を探っている。正解率を掛け合わせたリーディング速度とは、谷口(1989)、安藤(1989)を参考に正解率の基準を70%に置き、掛け合わせたリーディング速度である。これはリーディング速度がいくら速くとも正解率が極端に低い、あるいは正解率が高くともリーディング速度が著しく遅いという場合を考慮したものである。例えば、1分間に100語読み、正解率が80%であれば、 $100\text{wpm} \times (80\% / 70\%) = 114\text{wpm}$ となる。

これら3つのデータから、受講中のOAとUAを比較した結果、OAに較べてUAの文章理解度が低いこと、また理解度の低さにもかかわらずUAはOAより英文を速く読む傾向があることがわかった。つまりUAは理解できていてもいなくても速いスピードで英文を読み終えようとしていることが明らかになった。それに対して、正解率を掛け合わせたリーディング速度の比較から、OAは、持てる英語力を一杯使い、内容を理解しながらできるだけ速く英文を読もうとしていることがわかった。言い換えれば、できるだけ早く課題を済まそうとするUAと、集中力をもって課題に取り組んでいるOAの姿勢の違いが浮き彫りとなったのである。

また、青木・渡辺(2004)においてはリスニングプログラムの受講中データから、OAUAの違いを探る試みを行った。リスニングプログラムの受講中データとは、TOEICリスニングパートに準拠した問題約800問に対する正解率や、解答後の学習行動についてのものである。リスニングプログラムでは、解答後の画面において、指定のボタンを押すことにより、問題のスク립トや日本語訳をみることができ、また問題音声も繰り返し聞くことができる。そして、これらのボタンを押したか否かはすべてサーバに記録されており、それぞれの学習者が問題に正解した後の行動や、あるいは不正解であった場合の行動などがわかるのである。

これらのデータを用いて、2002年度のIETW受講者のデータを分析した結果、問題解答後の行動につ

いては、OAとUAの間に一切有意な差はみられなかった。しかし、問題に対する正解率については、プログラム後半のみならず、プログラム開始直後からすでにOAが有意に高いことが明らかになった。OAとUAはプログラム終了後の英語力の伸びが異なるわけであるから、プログラム後半において正解率が異なることは理解できるが、英語力に差のないはずのプログラム開始直後から、すでにリスニング問題の正解率においてOAが有意に高いという結果であった。

これらの結果について、OAとUAの正解率の差は、問題に対する集中力の違いから生じ、その集中力の差がリスニング力そのものの差になっていくと青木は解釈している。そして解答後の行動については、何度も聞きなおし、スク립トをチェックするということは、ある意味でフィードバックに依存し、最初の聞きに対する集中力を甘くしている場合も考えられ、何度も聞きなおすという行動は必ずしもOAの特徴ではないとしている。

しかし、この学習行動については、2003年度IETWの受講生データからの分析では、また少し異なった結果がでており、現在、より詳細に傾向を分析中である。

さて、本研究は受講前後に実施するアンケート回答を用いて、OAUAの違いを探ろうとするものであるが、これまでも、受講前後に実施するアンケートからOAとUAの違いを探る試みは、小規模ながら行ってきた。(渡辺・青木 2001; 青木・渡辺 2002)。これらの研究結果から、OAは自身の学習成果を厳しく捉えており向上したという実感に乏しいのに対し、UAは自身の学習を客観的に捉えておらず、自分は学習に集中し、成績も向上したに違いないという誤った自己認識をもっている傾向のあることがわかっている。言い換えれば、UAには「自分の実際に達成したことと、自分の学習に対する認識になんらかのずれ」(渡辺・青木 2001: 237)がみられたのである。

しかし、アンケートを利用したこれらの調査からは、OAとUAを分ける決定的な要因を探ることはできなかった。その理由は、まず渡辺・青木(2001)では、特にOAとUAの違いを探る目的でアンケートを実施したわけではなく、クラスター分析によって受講者を分類した結果、OAとUAに相当する群がみられたことから、その傾向を報告したものであり、また青木・渡辺(2002)については、アンケート回答者数が少なかったことから、1回のプログラム受

講者のみを対象としたものであった。さらに渡辺・青木(2001)、青木・渡辺(2002)のいずれも、課外プログラムとして実施されたIETWの結果を分析したものであり、そのプログラムには授業外に英語を勉強したいと希望した者、つまりかなり動機の高い者が多く集まっていた。したがって、英語学習に対する動機や取り組みの点で、分析データが偏っていた恐れがあったのである。

このように、これまでのアンケートによるOAとUAを調査する試みは様々な点で不完全なものであった。そこで、本研究では、OAとUAの違いを探ることを主目的として、これまでの調査結果を参考にアンケートを改良した。さらにより多様な学習者が含まれるよう、IETWを正規英語授業科目として受講した者を対象として、アンケート調査を実施した(Appendixes参照)。

Ⅲ. 調 査

分析対象としたのは、2003年のIETW受講者である。国際学部1年生の英語必修科目である「CALL英語集中」でIETWを受講した103名と、情報科学部及び芸術学部1年生の英語選択科目「CALL英語総合」でIETWを受講した106名である。

できるだけ大量のデータから、OAとUAの特徴を探ることが理想であるが、前期と後期とでは、異なったTOEIC IPを受験するので、テストの難易度が異なり、OAとUAを規定する得点伸び率の比較が難しい。したがって、まず分析1では、前期にプログラムを受講した学習者と後期に受講した者というように、学期別に分析を行い、OAとUAの特徴をつかむ。

しかし、前期受講者の中には、「CALL英語集中」として履修した国際学部1年生と「CALL英語総合」

として履修した情報科学部、芸術学部1年生が含まれ、また後期受講者も同様に、国際学部と情報科学部、芸術学部の学生が混在している。学部により英語に対する動機なども当然変わると予想されるので、分析2では前期および後期受講者をさらに「CALL英語集中」として履修した国際学部生、「CALL英語総合」として履修した情報学部生と芸術学部生というように細かく分け、より同様の条件下でのOAUの特徴を探ることとする。

3.1 分析1

まず、OA及びUAに該当する受講者を選定するに当たって、以下のことに配慮した。事前TOEICスコアがいくらかによって、つまり天井効果により伸び得点が大きく異なるので、平均値から±1標準偏差内の者を対象とし、あまりに事前スコアが低い者や高い者はずした。しかし、平均値から±1標準偏差内の者だけを対象としても、それでもまだ事前スコアが伸び得点の幅に影響するので、伸び率をそろえるために、「伸び得点」(事後得点－事前得点)を「伸び余地得点」(リスニングセクションの満点－事前得点)で割った数値を利用して伸び率を比較した。例えば、事前得点が200点で、事後300点になった者であれば、 $(300-200) \div (495-200) = 0.34$ となる。一方、事前得点300から事後得点が400になった者であれば、 $(400-300) \div (495-300) = 0.51$ となる。つまり、天井効果を考慮に入れると、同じ100点の伸びでも後者のほうがより高く評価されることになる。このように伸び率をそろえた上で、平均伸び率より上位者をOA、下位者をUAと定義した。

表1はOA、UAと分類された人数、それらの受講者の事前事後TOEICリスニングスコア、そして伸び率の平均値を示している。

このようにOA、UAを分類した上で、まず、それ

表1 前・後期受講者基礎データ

対象人数		前期受講者	後期受講者
		36	34
事前スコア平均(SD)	OA	233.9(36.6)+	242.4(31.5)
	UA	219.0(35.8)	239.2(31.6)
事後スコア平均(SD)	OA	311.0(35.0)**	322.4(39.6)**
	UA	220.0(43.1)	247.7(30.0)
伸び%平均(SD)	OA	29%(9.8%)**	32%(11.4%)**
	UA	0.0%(14.8%)	3%(10.0%)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

ぞれのアンケート項目に対する回答値平均を比較する。次にアンケート項目を因子分析し、共通因子を抽出した上で、それぞれの因子得点を比較する。

3.1.1 前期受講者・事前アンケート結果

項目3「英語は好きですか」と項目4「英語を聴くことは好きですか」という二つの項目において差がみられ、その差には有意傾向があった。つまり、OAはUAより英語に対して、より動機付けが高い傾向があるということになる。しかし、留学経験やこれまでの学習経験、また学習に対するメタ意識などについては、OAとUAの間に差はみられなかった(表2)。

つぎにこれらのアンケート項目を因子分析にか

け、共通因子を抽出した上で、それぞれの因子得点を比較する。その理由は、それぞれの項目別では回答に大きな違いがみられない場合でも、共通因子別にみると差が明らかになる場合があるからである。

因子分析の結果(表3)、事前アンケートについては3個の因子が抽出され、項目に対する負荷量から、それぞれ「英語が好き」(第1因子)、「過去1年にリスニング力が伸びた」(第2因子)、「学習に対するメタ意識」(第3因子)と名づけた。

つぎにこれら3つの因子による因子得点を、OAとUAで比較した結果(表4)、「英語が好き」(第1因子)に有意傾向がみられた。つまり、事前アンケートから見る限り、OAとUAは、英語に対する動機付けの点で違いがあるという結果になった。

表2 前期受講者事前アンケート項目平均値比較

	前1	前2	前3	前4	前5
OA Av. (SD)	4.09 (0.98)	3.67 (1.04)	4.11 (1.04) +	3.86 (1.13) +	1.94 (0.23)
UA Av. (SD)	3.89 (0.90)	3.71 (0.89)	3.60 (1.17)	3.37 (0.94)	1.97 (0.17)
	前6	前7	前8	前9	前10
OA Av. (SD)	2.50 (1.56)	3.69 (0.92)	2.89 (1.41)	2.92 (1.13)	2.61 (1.18)
UA Av. (SD)	2.11 (1.41)	3.60 (1.12)	2.40 (1.19)	2.77 (1.26)	2.34 (1.14)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

注、前1とは事前アンケートの項目1のことを指す。

表3 前期受講者事前アンケート因子分析負荷量

	英語が好き	過去に伸び	学習意識	共通性
前1	0.47	-	-	0.27
前2	0.64	-	-	0.45
前3	0.92	-	-	0.91
前4	0.51	0.49	-	0.52
前5	-	-	0.55	0.32
前6	-	0.55	-	0.33
前7	-	-	0.41	0.21
前8	-	-	0.45	0.28
前9	-	0.44	0.41	0.43
前10	-	0.95	-	0.94
説明分散	19.6	17.6	9.4	

0.39以下の負荷量は省略

表4 前期受講者事前アンケート因子得点比較

	「英語が好き」	「過去に伸び」	「学習意識」
OA Av. (SD)	0.22 (0.86) +	0.11 (0.94)	0.01 (0.87)
UA Av. (SD)	-0.22 (0.99)	-0.11 (0.98)	-0.01 (0.65)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.1.2 前期受講者・事後アンケート結果

つぎにプログラムの事後に実施されたアンケート結果をみていく。この事後アンケートは、受講者が事後テストとしてのTOEICを受験する前に実施される。したがって、リスニング力が伸びたか否かといった事後アンケート中の質問に対しては、受講者たちは自分たちの感覚や印象で判断しているのであり、事後TOEIC結果に基づいて判断しているのではないことをことわっておく。事後アンケート分析においても、まずアンケート項目それぞれに対する回答値を比較し、その後因子得点を比較する。

事後アンケートに対する回答平均値を比較した結果、多くの項目において、OAとUAに違いがみられることがわかった。まず、プログラム学習量について訊ねた項目1「問題量はどうでしたか」に対しては、UAがかなり多かったと感じている。また、取り組みについて訊ねた項目3「リスニング課題に対する自分自身の取り組みについてどう思いますか」や、12「提示された問題をいつも集中力をもって聞きましたか」においても、OAがより真剣に取り組んだと感じていることが明らかになった（表5）。

さて、これらのアンケート回答を因子分析にかけた結果、4つの因子が抽出された（表6）。アンケート項目に対する負荷量から、第1因子を「向上感」、第2因子を「Part 3と4に感じる容易さ」、第3因子

を「真剣な取り組み」、第4因子を「Part 1と2に感じる容易さ」とそれぞれ名づけた。

因子得点を比較した結果、特に第1因子、第2因子、第3因子に違いがみられることがわかった（表7）。まず第1因子に有意傾向がみられることから、OAはプログラム受講後、リスニング力が伸びたとUAより実感しているということがわかる。そして、TOEICのリスニング問題で比較的長い文を聞き取るPart 3と4に対しては、OAがUAより容易に感じていること、また、リスニング課題に対してより真剣に取り組んだという感想をもっていることなどが明らかになった。その一方で、やや短い文を聞き取るPart 1や2に対しては、OA、UAの間に違いはみられなかった。

さて、前期科目としての「CALL英語集中」および「CALL英語総合」において実施したアンケート結果をまとめてみる。プログラム事前アンケートからは、OAはUAに対して動機付けの点から優っていることがわかった。そして事後アンケートからは、OAはプログラムにより真剣に取り組んだこと、そしてリスニング力が向上した感覚をもっていること、さらにそれは長い文の聞き取りに大きく違いとして現れていることが明らかになったと言えるだろう。

表5 前期受講者事後アンケート項目平均値比較

	後1	後2	後3	後4	後5
OA Av. (SD)	2.39 (0.80)**	4.36 (0.68)	3.89 (0.82)**	4.03 (0.65)*	3.83 (0.65)+
UA Av. (SD)	1.80 (0.68)	4.49 (0.56)	3.17 (0.92)	3.66 (0.73)	3.54 (0.78)
	後6	後7	後8	後9	後10
OA Av. (SD)	3.17 (0.88)	2.67 (0.76)**	1.97 (0.70)*	3.36 (0.99)+	3.58 (0.91)
UA Av. (SD)	2.89 (0.72)	2.11 (0.63)	1.63 (0.73)	2.86 (1.17)	3.40 (0.74)
	後11	後12	後13		
OA Av. (SD)	3.83 (0.74)	3.81 (0.71)**	4.36 (0.80)		
UA Av. (SD)	3.66 (0.91)	3.23 (0.73)	4.06 (0.80)		

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表6 前期受講者事後アンケート因子分析負荷量

	「向上感」	「Part 3, 4 容易さ」	「真剣取組」	「Part 1, 2 容易さ」	共通性
後1	0.49	-	-	-	0.42
後2	-	-	-	-	0.08
後3	-	0.43	0.49	-	0.46
後4	0.71	-	-	-	0.56
後5	-	-	-	0.66	0.46
後6	-	-	-	0.77	0.66
後7	-	0.56	-	-	0.53
後8	-	0.85	-	-	0.84
後9	-	-	0.76	-	0.67
後10	0.76	-	-	-	0.61
後11	0.40	-	-	-	0.19
後12	-	-	0.50	-	0.41
後13	-	-	-	-	0.13
説明分散	13.9	11.3	10.7	10.4	

0.39以下の負荷量は省略

表7 前期受講者事後アンケート因子得点比較

	「向上感」	「Part 3 / 4 容易さ」	「真剣取組」	「Part 1 / 2 容易さ」
OA Av.(SD)	0.18 (0.89)+	0.21 (0.85)*	0.26 (0.78)**	0.15 (0.88)
UA Av.(SD)	-0.19 (0.79)	-0.22 (0.91)	-0.27 (0.80)	-0.16 (0.85)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.1.3 後期受講者・事前アンケート結果

さて、後期履修者の事前アンケートの項目平均値からは、やはり項目3「英語は好きですか」と4「英語を聴くことは好きですか」において差がみられることがわかった(表8)。つまり、英語や英語を聴くことが好きであるという点において、OAはUAよりかなり値が高く、つまり、前期履修者の場合と同様、動機の点で違いがあるということが明らかになった。

さて、これらのアンケート回答を因子分析にかけ、

4つの因子を抽出した(表9)。アンケート項目に対する負荷量から、第1因子を「英語が好き」、第2因子を「学習に対するメタ意識」、第3因子を「実践練習の有無」、第4因子を「学習方法を学んだことの有無」と名づけた。そして、これらの因子による因子得点を、OAとUAで比較した結果、第1因子において、有意な差がみられ、やはりプログラム受講前におけるOAとUAとでは、英語学習に対する動機の点で大きく異なっているということが裏付けられた(表10)。

表8 後期受講者事前アンケート項目平均値比較

	前1	前2	前3	前4	前5
OA Av.(SD)	4.12(0.84)	3.15(1.16)	4.21 (0.95)**	3.62 (0.95)**	1.94(0.24)
UA Av.(SD)	3.85(0.80)	3.18(1.10)	3.45(1.30)	2.94(1.09)	1.91(0.29)
	前6	前7	前8	前9	前10
OA Av.(SD)	2.09(1.40)	3.12(1.20)	2.15(1.23)	2.65(1.20)	2.65(1.10)
UA Av.(SD)	2.03(1.31)	3.30(1.24)	2.30(1.38)	2.73(1.48)	2.73(1.18)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表9 後期受講者事前アンケート因子分析負荷量

	「英語が好き」	「学習意識」	「実践練習」	「方法を学んだ」	共通性
前1	-	-	0.61	-	0.43
前2	0.48	-	-	-	0.26
前3	0.86	-	-	-	0.75
前4	0.51	-	-	-	0.39
前5	-	-	0.51	-	0.28
前6	-	0.50	0.46	-	0.54
前7	-	0.93	-	-	0.90
前8	-	-	-	0.87	0.76
前9	-	-	-	-	0.34
前10	-	-	-	-	0.19
説明分散	15.4	12.8	10.2	10.0	

0.39以下の負荷量は省略

表10 後期受講者事前アンケート因子得点比較

	「英語が好き」	「学習意識」	「実践練習」	「方法を学んだ」
OA Av.(SD)	0.25 (0.69)*	-0.07 (0.97)	0.10 (0.75)	-0.08 (0.83)
UA Av.(SD)	-0.26 (1.00)	0.07 (0.93)	-0.10 (0.84)	0.08 (0.93)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.1.4 後期受講者・事後アンケート結果

受講後のアンケート結果では、項目3「リスニング課題に対する自分自身の取り組みについてどう思いますか」と4「リスニングプログラムはあなたにとって英語力向上に役立ちましたか」において、有意な差がみられた(表11)。つまり、OAは課題に対する取り組みについて、UAより真面目に取り組んだと思っており、また、プログラム受講後、リスニング力が伸びたという印象をもっていることが明らかになった。

さて、これらの事後アンケート回答を因子分析にかけた結果、4つの因子が抽出され、それぞれ第1因子が「真剣な取り組み」、第2因子が「Part 2, 3, 4に感じる容易さ」、第3因子が「向上感」、第4因子が「再受講希望」と名づけられた(表12)。

これら4つの因子における因子得点をOAとUAで比較した結果、第1因子にのみ有意傾向が検出された。つまり、OAはUAと比較してより真剣にリスニングプログラムに取り組んだという印象をもっていることがわかった(表13)。

以上、前期にIETWを受講した学習者に実施したアンケート、後期に受講した学習者を対象としたアンケートを分析してきた。ここまでで明らかになっ

たことをまとめてみよう。

まず、事前アンケート結果からは、前期、後期ともに、OAとUAを分ける要因が、英語学習に対する動機付けであることが明らかになった。つまり、IETW受講前に英語を勉強したいという気持ちにおいてすでに差があったとみられる。

事後アンケート分析結果については、前期と後期とでやや傾向が異なっていた。前期アンケートでは、4つの因子「向上感」「Part 3, 4に感じる容易さ」「真剣な取り組み」「Part 1, 2に感じる容易さ」が抽出され、「向上感」に有意傾向、「Part 3, 4に感じる容易さ」「真剣な取り組み」に有意差がみられた。一方、後期アンケートでは「真剣な取り組み」「Part 2, 3, 4に感じる容易さ」「向上感」「再受講希望」という4つの因子が抽出され、「真剣な取り組み」においてその差が有意傾向を示した。

これら2つのアンケート分析結果を合わせると、OAはUAと比較して動機において優っており、プログラムにより真剣に取り組んだと言える。そして、その結果、リスニング力が向上したという実感があり、それは特に長い文の聞き取りにおいて如実に感じたということになる。

表11 後期受講者事後アンケート項目平均値比較

	後 1	後 2	後 3	後 4	後 5
OA Av. (SD)	2.32 (0.77)	4.15 (0.66)	4.00 (0.89) *	3.97 (0.67) *	3.61 (0.66)
UA Av. (SD)	2.30 (0.77)	4.30 (0.68)	3.52 (0.97)	3.64 (0.60)	3.82 (0.85)
	後 6	後 7	後 8	後 9	後10
OA Av. (SD)	2.82 (0.63)	2.47 (0.71)	1.91 (0.71)	3.68 (1.17)	3.44 (0.93)
UA Av. (SD)	2.82 (0.77)	2.39 (0.86)	1.79 (0.70)	3.36 (0.82)	3.39 (0.66)
	後11	後12	後13		
OA Av. (SD)	3.74 (1.11)	3.82 (0.83)	4.18 (0.90)		
UA Av. (SD)	3.36 (0.99)	3.67 (0.60)	3.88 (0.78)		

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表12 後期受講者事後アンケート因子分析負荷量

	「真剣取組」	「Part 2, 3, 4 容易さ」	「向上感」	「再受講希望」	共通性
後 1	0.41	-	-	0.54	0.49
後 2	-	-	-	-	0.09
後 3	0.83	-	-	-	0.71
後 4	0.47	-	0.62	-	0.70
後 5	-	-	-	-	0.07
後 6	-	0.45	0.53	-	0.49
後 7	-	0.88	-	-	0.80
後 8	-	0.65	-	-	0.43
後 9	0.53	-	-	-	0.44
後10	-	-	0.57	0.41	0.59
後11	-	-	-	0.82	0.87
後12	0.66	-	-	-	0.46
後13	0.57	-	-	-	0.41
説明分散	17.6	11.4	11.0	10.4	

0.39以下の負荷量は省略

表13 後期受講者事後アンケート因子得点比較

	「真剣取組」	「Part 2, 3, 4 容易さ」	「向上感」	「再受講希望」
OA Av. (SD)	0.21 (0.94) +	0.03 (0.79)	0.07 (0.77)	0.14 (0.82)
UA Av. (SD)	-0.21 (0.82)	-0.03 (1.04)	-0.07 (0.89)	-0.14 (0.93)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2 分析 2

前期と後期に分けて分析したアンケート結果からは、OAはUAより動機付けにおいて上回っており、またプログラムに対する取り組みにおいて、その真剣さが優っていた。OAとUAの違いを特徴づける要因については、かなり明確に浮き彫りにされたと言える。

さて、これまで前期にIETWを受講した者と後期に受講した者というようにまとめて分析してきた。前期にIETWを受講した者とは、「CALL英語集中」として受講した者と「CALL英語総合」として受講

した者両方を含む。「CALL英語集中」とは上で述べたように、国際学部1年生対象の必修科目であり、「CALL英語総合」とは情報科学および芸術学部の1年生対象選択科目である。要するに、同じ前期受講者と言っても、所属学部も異なれば、科目の位置づけも異なっている。学部の性格上、国際学部の学生は他学部の学生より英語に対する関心が高いし、また必修科目で受講するほうが選択科目として受講するより、より真剣味が増すであろうことは想像に難くない。

OAとUAを差異づける要因にさらに深く迫るため

表14 各群基礎データ

		前期	後期	前期	後期
		「CALL英語集中」	「CALL英語集中」	「CALL英語総合」	「CALL英語総合」
対象人数	OA	27	25	29	25
	UA	24	27	26	26
事前スコア平均(SD)	OA	271.1 (72.7)	256.0 (49.0)	185.0 (52.5)	202.2 (47.5)
	UA	249.4 (52.4)	278.7 (66.2)	216.5 (44.9)*	229.6 (40.4)*
事後スコア平均(SD)	OA	357.2 (54.5)**	342.8 (47.2)**	260.2 (43.3)**	276.6 (46.5)**
	UA	267.1 (59.7)	296.7 (58.9)	216.9 (49.0)	231.5 (39.2)
伸び%平均(SD)	OA	40.4% (14.1%)**	36.8% (11.6%)**	24.1% (6.8%)**	25.6% (9.2%)*
	UA	6.9% (15.6%)	7.1% (14.3%)	-0.4% (14.3%)	0.2% (8.7%)

には、学部の違いなどを超えて、より同様の条件下で現れたOAとUAの違いをみていく必要がある。ここでは、IETW受講者を前期「CALL英語集中」、後期「CALL英語集中」、前期「CALL英語総合」、後期「CALL英語総合」という4つの学習群に分けて分析を行う。各群に分けて分析することによって、同じ条件下、つまり同一の学部で同一の科目位置づけの中で現れるOAとUAを決定づける要因について、深く迫ることができると考える。ただ、4つの学習群に分けた分析では、それぞれの群において学習者数が少なくなる。多変量解析も含めた数量的な比較分析を行うため、この分析ではOAとUA対象者認定において、あらかじめ事前リスニングスコアの平均値±1SD以上の者を排除するという手続きを省略する。つまり、伸びの天井効果を考慮し、受講者の中から事前得点のあまりに高い者や低い者を排除してから、スコア伸び率を計算し、OAとUAを設定していたが、本分析では全員を対象にその伸び率から直接OAとUAを設定し、分析のための人数を確保することとした。また、「CALL英語集中」の前期と後期、「CALL英語総合」の前期と後期の比較は行わない。上でも述べたが、前期と後期では受験したTOEICが異なるからである。

表14は各群の基礎データである。伸び%をみると「CALL英語集中」前期、後期におけるOAの伸びは「CALL英語総合」のそれと比較してかなり高いこと

がわかる。また、「CALL英語総合」においては前期後期のいずれにおいてもUAの事前スコアが有意に高く、このことは伸び率の差に事前スコアが影響していることを想像させる。これまでの研究結果からも、事前スコアの低いことが、受講後の伸びをより大きくすることが明らかになっており（青木・渡辺 2000；渡辺・青木 2001；青木・渡辺 2002）、伸び率の計算では、上で示したように、事前スコアによる伸び余地を考慮する計算式を用いている。しかし、表14にあるように、「CALL英語総合」の受講者の場合は、事前スコアに有意差がみられることから、事前スコアがOAとUAを分ける際に影響を与えた可能性がある。

さて、各群ごとに事前アンケート、事後アンケートと分析していくことにする。

3.2.1 前期「CALL英語集中」・事前アンケート結果

事前アンケートにおける回答平均値を比較した結果、OAとUAとの間に差はまったくみられない（表15）。次にこれらのデータを因子分析にかけ、3つの因子を抽出し、第1因子を「英語が好き」、第2因子を「実践練習経験と伸び経験の有無」、第3因子を「学習に対するメタ意識」と名づけた（表16）。そして、これらの因子による因子得点平均をOAとUAで比較したところ、いずれにおいても有意な差はみられなかった（表17）。

表15 前期「CALL英語集中」事前アンケート項目平均値比較

	前1	前2	前3	前4	前5
OA Av. (SD)	4.58 (0.58)	4.00 (1.04)	4.33 (1.11)	4.30 (0.99)	1.89 (0.32)
UA Av. (SD)	4.38 (0.92)	3.96 (0.69)	4.42 (0.72)	4.08 (0.88)	1.92 (0.28)
	前6	前7	前8	前9	前10
OA Av. (SD)	2.63 (1.50)	3.81 (1.04)	3.07 (1.38)	3.26 (1.13)	3.19 (1.21)
UA Av. (SD)	3.17 (1.55)	3.92 (0.83)	2.67 (1.27)	3.50 (1.06)	2.88 (1.03)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表16 前期「CALL英語集中」事前アンケート因子分析負荷量

	「英語が好き」	「実践練習と伸び経験」	「学習意識」	共通性
前1	0.39	-	-	0.21
前2	0.60	-	0.46	0.59
前3	0.97	-	-	0.63
前4	0.45	-	-	0.39
前5	-	-	-	0.20
前6	-	0.53	-	0.37
前7	-	-	0.86	0.38
前8	-	-	0.51	0.27
前9	-	-	-	0.22
前10	-	0.99	-	0.50
説明分散	17.5	15.6	14.3	

0.39以下の負荷量は省略

表17 前期「CALL英語集中」事前アンケート因子得点比較

	「英語が好き」	「実践練習と伸び経験」	「学習意識」
OA Av.(SD)	-0.02(1.14)	0.12(1.06)	-0.02(0.96)
UA Av.(SD)	0.02(0.84)	-0.13(0.94)	0.02(0.83)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2.2 前期「CALL英語集中」・事後アンケート結果

事後アンケート結果からは、項目3「リスニング課題に対する自分自身の取り組みについてどう思いますか」において、OAがより真面目に取り組んだという点以外は、OAとUAの間に際立った違いはみられない（表18）。

事後アンケートデータを因子分析にかけ、5つの

因子、第1因子「向上感」、第2因子「集中力とPart 1, 2, 3に感じる容易さ」、第3因子「取り組みとPart 3, 4に感じる容易さ」、第4因子「ボタン参照度」、第5因子「問題量に対する印象」を抽出したが、いずれの因子においても、その因子得点平均にOAとUAの間に差はみられなかった（表19, 20）。

表18 前期「CALL英語集中」事後アンケート項目平均値比較

	後1	後2	後3	後4	後5
OA Av.(SD)	2.52(0.75)	4.15(0.77)	4.19(0.79)+	4.11(0.75)	3.85(0.60)
UA Av.(SD)	2.17(0.76)	4.25(0.74)	3.71(1.08)	4.13(0.45)	3.58(0.83)
	後6	後7	後8	後9	後10
OA Av.(SD)	3.26(0.86)	2.89(0.70)	2.19(0.68)	3.52(1.16)	3.56(0.93)
UA Av.(SD)	3.42(0.83)	2.88(0.68)	2.21(0.78)	3.83(0.87)	3.83(0.70)
	後11	後12	後13		
OA Av.(SD)	3.81(0.88)	3.96(0.59)	4.07(1.07)		
UA Av.(SD)	3.83(0.70)	3.83(0.64)	4.08(0.93)		

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表19 前期「CALL英語集中」事後アンケート因子分析負荷量

	「向上感」	「集中力とPart1, 2, 3の易さ」	「取組とPart3, 4の易さ」	「ボタン参照度」	「問題量に対する印象」	共通性
後1	-	-	-	-	0.80	0.68
後2	-	-	-	-	-	0.18
後3	-	-	-	-	-	0.21
後4	0.73	-	-	-	-	0.55
後5	-	0.47	-	-	-	0.27
後6	-	0.70	-	-	-	0.54
後7	-	0.49	0.57	-	-	0.64
後8	-	-	0.68	-	-	0.47
後9	-	-	0.44	0.44	0.43	0.61
後10	0.82	-	-	-	-	0.74
後11	0.60	-	-	-	-	0.50
後12	-	0.53	-	-	-	0.38
後13	-	-	-	0.89	-	0.85
説明分散	20.8	11.8	7.5	6.4	4.4	

0.39以下の負荷量は省略

表20 前期「CALL英語集中」事後アンケート因子得点比較

	「向上感」	「集中力とPart1, 2, 3の易さ」	「取組とPart3, 4の易さ」	「ボタン参照度」	「問題量に対する印象」
OA Av. (SD)	-0.05 (1.08)	0.01 (0.81)	-0.08 (0.73)	-0.04 (1.01)	0.14 (0.92)
UA Av. (SD)	0.06 (0.66)	-0.01 (0.89)	0.09 (0.92)	0.04 (0.81)	-0.15 (0.74)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2.3 後期「CALL英語集中」・事前アンケート結果

「CALL英語集中」後期受講者に実施された事前アンケートの分析結果からも、前期と同様、OAとUAの間に違いはみられなかった（表21）。また、因子分析から抽出された3つの因子、「英語が好き」、

「学習意識」、「実践練習の有無」のいずれにおいても有意な差はみられなかった（表22, 23）。同じ国際学部で必修科目として履修している者の間では、動機づけなどの点において差がみられないという結果となった。

表21 後期「CALL英語集中」事前アンケート項目平均値比較

	前1	前2	前3	前4	前5
OA Av. (SD)	4.36 (0.70)	3.20 (1.12)	4.28 (0.98)	3.60 (1.00)	1.92 (0.28)
UA Av. (SD)	4.30 (0.72)	3.19 (1.33)	3.93 (1.24)	3.67 (1.18)	1.89 (0.32)
	前6	前7	前8	前9	前10
OA Av. (SD)	2.60 (1.50)	3.48 (1.23)	2.36 (1.32)	3.12 (1.30)	2.92 (1.19)
UA Av. (SD)	2.70 (1.71)	3.70 (1.20)	2.85 (1.41)	3.44 (1.31)	2.59 (1.15)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表22 後期「CALL英語集中」事前アンケート因子分析負荷量

	「英語が好き」	「学習意識」	「実践練習の有無」	共通性
前1	-	-	-	0.18
前2	0.68	-	-	0.62
前3	0.78	-	-	0.66
前4	0.73	-	-	0.60
前5	-	-	-	0.14
前6	-	-	0.87	0.84
前7	-	0.53	-	0.40
前8	-	0.47	-	0.36
前9	-	0.73	-	0.59
前10	-	-	-	0.26
説明分散	19.8	14.1	12.7	

0.39以下の負荷量は省略

表23 後期「CALL英語集中」事前アンケート因子得点比較

	「英語が好き」	「学習意識」	「実践練習の有無」
OA Av.(SD)	0.09(0.76)	-0.10(0.83)	-0.08(0.88)
UA Av.(SD)	-0.09(1.01)	0.09(0.84)	0.07(0.94)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2.4 後期「CALL英語集中」・事後アンケート結果

事後アンケートにおける各項目平均値を比較すると、いくつかの点において、OAとUAが異なるという結果が得られた(表24)。項目4「リスニングプログラムは英語力向上に役立ちましたか」、項目9「消化することが気になり、じっくり取り組みませんでしたか」、項目11「リスニングプログラムを再受講したいですか」、項目13「参照ボタンを利用しましたか」のそれぞれにおいて、差が有意、あるいは有意傾向でOAが高いという結果であった。このことから、OAはUAに較べて熱心にプログラムを受講しており、またプログラム後の向上感をもっていることがわかる。

さて、因子分析の結果、5つの因子が抽出され、

第1因子が「向上感」、第2因子が「Part 2, 3, 4に感じる容易さ」、第3因子が「学習を早く済ませた」、第4因子が「真剣な取り組み」、そして第5因子が「量の少なさとPart 4に感じる容易さ」と名づけられた(表25)。そのうち、第1因子においてOAが、第3因子においてはUAが高く、その差に有意傾向がみられた(表26)。つまり、プログラム後の「向上感」ではOAが高く、よりリスニング力が向上したという印象をもつ一方で、UAはプログラム受講をより短時間で済ませたという印象をもっていることがわかった。

前・後期「CALL英語集中」クラスについての分析結果をまとめると、同じ国際学部であり、同じ必修科目としての位置づけだけに、プログラムに対す

表24 後期「CALL英語集中」事後アンケート項目得点比較

	後1	後2	後3	後4	後5
OA Av.(SD)	2.44(0.77)	4.24(0.66)	3.88(1.17)	4.04(0.61)+	3.56(0.65)
UA Av.(SD)	2.30(0.82)	4.41(0.57)	4.04(0.76)	3.70(0.78)	3.92(0.80)+
	後6	後7	後8	後9	後10
OA Av.(SD)	2.96(0.79)	2.60(0.71)	1.96(0.73)	4.00(0.87)*	3.52(0.82)
UA Av.(SD)	3.04(0.94)	2.44(0.97)	1.81(0.68)	3.37(1.11)	3.26(0.98)
	後11	後12	後13		
OA Av.(SD)	3.92(0.81)*	4.00(0.50)	4.44(0.71)+		
UA Av.(SD)	3.19(1.33)	3.74(0.76)	4.00(0.96)		

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

る動機など、事前アンケートにおいては、まったく差はみられない。しかし、事後アンケートではOAがより真剣にプログラムに取り組んだということ、

一方でUAは学習を早く済ませるなどの違いが明らかになった。

表25 後期「CALL英語集中」事後アンケート因子分析負荷量

	「向上感」	「Part2、3、4容易さ」「学習を早く済ませた」	「真剣取組」	「量の少なさとPart4容易さ」	共通性
後1	0.46	-	-	0.68	0.72
後2	-	-	0.76	-	0.63
後3	-	-	-	0.97	1.00
後4	0.83	-	-	-	0.82
後5	-	-	-	-	0.38
後6	-	0.54	0.45	-	0.68
後7	-	0.99	-	-	1.00
後8	-	0.52	-	0.42	0.55
後9	0.62	-	-	-	0.52
後10	0.88	-	-	-	0.84
後11	0.78	-	-	-	0.67
後12	0.54	-	-	-	0.52
後13	0.43	-	-0.52	-	0.61
説明分散	25.4	14.0	9.5	8.8	5.9

0.39以下の負荷量は省略

表26 後期「CALL英語集中」事後アンケート因子得点比較

	「向上感」	「Part2、3、4容易さ」「学習を速く済ませた」	「真剣取組」	「量の少なさとPart4容易さ」
OA Av.(SD)	0.25 (0.83)+	0.03 (0.87)	-0.23 (0.85)	-0.17 (1.18)
UA Av.(SD)	-0.24 (1.03)	-0.03 (1.13)	0.22 (0.86)+	0.16 (0.76)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2.5 前期「CALL英語総合」・事前アンケート結果

ここでは、情報科学部や芸術学部の1年生を対象とした「CALL英語総合」の前・後期アンケートを分析していく。上でも述べたが、国際学部1年生対象の「CALL英語集中」と異なり、「CALL英語総合」は選択科目である。

前期に受講した者に実施した事前アンケートからは、OAとUAを分ける要因はみつからなかった（表

27）。因子分析から抽出された4つの因子、第1因子「英語が好き」、第2因子「英語を聴いた経験」、第3因子「学習に対するメタ意識」、第4因子「英語の必要性の低さと学習意識」のいずれについても、有意差は検出されなかった（表28、29）。つまり、事前アンケートで見える限りは、OAとUAに差はみられないということになる。

表27 前期「CALL英語総合」事前アンケート項目平均値比較

	前1	前2	前3	前4	前5
OA Av.(SD)	3.66 (0.94)	3.34 (0.97)	3.07 (1.22)	3.03 (1.05)	1.97 (0.19)
UA Av.(SD)	3.77 (0.76)	3.69 (1.01)	3.27 (1.15)	3.23 (0.91)	1.96 (0.20)
	前6	前7	前8	前9	前10
OA Av.(SD)	1.79 (1.05)	3.45 (0.95)	2.45 (1.27)	2.72 (1.28)	2.21 (1.11)
UA Av.(SD)	1.81 (1.20)	3.23 (1.18)	2.46 (1.30)	2.31 (1.01)	1.96 (1.04)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表28 前期「CALL英語総合」事前アンケート因子分析負荷量

	「英語が好き」	「英語を聴いた経験」	「学習意識」	「英語の必要性の低さと学習意識」	共通性
前1	-	-	0.40	-0.44	0.39
前2	0.65	-	-	-	0.47
前3	0.84	-	-	-	0.79
前4	0.42	0.47	-	-	0.43
前5	-	-0.52	0.45	-	0.52
前6	-	-	-	-	0.08
前7	-	-	-	0.64	0.41
前8	-	-	0.45	-	0.21
前9	-	-	0.62	-	0.52
前10	-	0.71	-	-	0.58
説明分散	20.4	9.4	8.1	6.1	

0.39以下の負荷量は省略

表29 前期「CALL英語総合」事前アンケート因子得点比較

	「英語が好き」	「英語を聴いた経験」	「学習意識」	「英語の必要性の低さと学習意識」
OA Av.(SD)	-0.12(0.90)	0.04(0.87)	0.09(0.82)	0.06(0.76)
UA Av.(SD)	0.13(0.89)	-0.05(0.80)	-0.10(0.78)	-0.07(0.73)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2.6 前期「CALL英語総合」・事後アンケート結果

受講後のアンケートからは、項目7「Part3は難しかったですか」においてOAがより易しく感じたという点、項目12「提示された問題をいつも集中力をもって聞きましたか」という点についてOAがよ

り集中力をもって聞いたという点、これら2点について違いがみられた(表30)。しかし、因子得点を比較した結果では、いずれの因子についてもOAとUAの間に有意な差はみられなかった(表31, 32)。

表30 前期「CALL英語総合」事後アンケート項目平均値比較

	後1	後2	後3	後4	後5
OA Av.(SD)	1.93(0.75)	4.48(0.63)	3.31(0.89)	3.69(0.66)	3.72(0.75)
UA Av.(SD)	1.92(0.80)	4.46(0.58)	3.12(0.82)	3.38(0.70)	3.58(0.81)
	後6	後7	後8	後9	後10
OA Av.(SD)	2.86(0.64)	2.34(0.81)*	1.48(0.63)	2.90(0.98)	3.28(0.84)
UA Av.(SD)	2.69(0.62)	1.92(0.56)	1.54(0.65)	2.65(1.13)	3.15(0.67)
	後11	後12	後13		
OA Av.(SD)	3.52(0.78)	3.59(0.78)+	4.24(0.83)		
UA Av.(SD)	3.58(0.95)	3.19(0.75)	3.96(0.77)		

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表31 前期「CALL英語総合」事後アンケート因子分析負荷量

	「向上感」	「Part1、2容易さ」	「真剣取組」	「Part3、4容易さ」	「問題量と再受講希望」	共通性
後1	-	-	-	-	0.67	0.48
後2	-	0.46	-	-	-	0.33
後3	-	-	0.68	-	-	0.55
後4	0.80	-	-	-	-	0.69
後5	-	0.79	-	-	-	0.74
後6	-	0.68	-	-	-	0.61
後7	-	-	-	0.65	-	0.50
後8	-	-	-	0.76	-	0.64
後9	-	-	0.52	-	0.40	0.47
後10	0.80	-	-	-	-	0.66
後11	-	-	-	-	0.47	0.25
後12	-	-	0.78	-	-	0.70
後13	-	-	-	-	-	0.09
説明分散	11.8	11.4	11.1	10.0	7.4	

0.39以下の負荷量は省略

表32 前期「CALL英語総合」事後アンケート因子得点比較

	「向上感」	「Part1、2容易さ」	「真剣取組」	「Part3、4容易さ」	「問題量と再受講希望」
OA Av.(SD)	0.12(0.95)	0.14(0.90)	0.18(0.83)	0.04(0.92)	0.04(0.77)
UA Av.(SD)	-0.13(0.84)	-0.16(0.89)	-0.20(0.89)	-0.04(0.83)	-0.05(0.81)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2.7 後期「CALL英語総合」・事前アンケート結果

事前アンケートにおいては、項目4「英語を聴くことは好きですか」という点においてのみ、OAが

高いという傾向がみられた(表33)。しかし、因子分析によって抽出された4つの因子については、OAとUAの間に差はみられなかった(表34, 35)。

表33 後期「CALL英語総合」事前アンケート項目平均値比較

	前1	前2	前3	前4	前5
OA Av.(SD)	3.64(0.86)	3.52(0.82)	3.68(1.22)	3.44(1.04)+	1.96(0.20)
UA Av.(SD)	3.65(0.85)	3.35(1.02)	3.19(1.36)	2.85(1.08)	1.92(0.27)
	前6	前7	前8	前9	前10
OA Av.(SD)	1.64(1.04)	3.32(1.22)	2.24(1.45)	2.36(1.25)	3.08(1.04)
UA Av.(SD)	1.96(1.25)	3.12(1.14)	2.54(1.33)	2.27(1.25)	2.73(1.22)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表34 後期「CALL英語総合」事前アンケート因子分析負荷量

	「学習意識1」	「英語が好き」	「学習意識2」	「実践練習の有無」	共通性
前1	-	-	-	-	0.39
前2	-	0.62	-	-	0.54
前3	-	0.87	-	-	0.77
前4	-	-	-	-	0.31
前5	-	-	-	-	0.21
前6	-	-	-	0.99	1.00
前7	-	-	0.98	-	1.00
前8	0.55	-	-	-	0.39
前9	0.91	-	-	-	1.00
前10	-	-	-	-	0.16
説明分散	14.3	14.1	11.9	11.7	

0.39以下の負荷量は省略

表35 後期「CALL英語総合」事前アンケート因子得点比較

	「学習意識1」	「英語が好き」	「学習意識2」	「実践練習の有無」
OA Av. (SD)	-0.01 (1.03)	0.18 (0.76)	0.12 (1.04)	-0.16 (0.90)
UA Av. (SD)	0.01 (0.96)	-0.17 (1.01)	-0.11 (0.97)	0.15 (1.08)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

3.2.8 後期「CALL英語総合」・事後アンケート結果

事後アンケートについては、いずれの項目につい

てもOAとUAの間に差はみられず、また、各因子項目についても差はなかった(表36, 37, 38)。

表36 後期「CALL英語総合」事後アンケート項目得点比較

	後1	後2	後3	後4	後5
OA Av. (SD)	2.28 (0.79)	4.28 (0.74)	3.64 (0.86)	3.72 (0.61)	3.68 (0.56)
UA Av. (SD)	2.38 (0.70)	4.31 (0.68)	3.35 (1.02)	3.58 (0.64)	3.81 (0.80)
	後6	後7	後8	後9	後10
OA Av. (SD)	2.72 (0.61)	2.12 (0.67)	1.76 (0.72)	3.36 (1.11)	3.40 (0.82)
UA Av. (SD)	2.77 (0.76)	2.35 (0.85)	1.73 (0.72)	3.08 (0.89)	3.38 (0.64)
	後11	後12	後13		
OA Av. (SD)	3.64 (0.81)	3.60 (0.76)	3.36 (0.99)		
UA Av. (SD)	3.54 (0.86)	3.58 (0.58)	3.77 (0.91)		

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

表37 後期「CALL英語総合」事後アンケート因子分析負荷量

	「真剣取組」	「向上感」	「Part2、3、4容易さ」	「Part1容易さ」	共通性
後1	0.41	-	-	-	0.21
後2	-	-	-	-	0.07
後3	0.70	-	-	-	0.55
後4	-	0.75	-	-	0.65
後5	-	-	-	0.47	0.25
後6	-	0.42	0.47	0.40	0.55
後7	-	-	0.85	-	0.78
後8	-	-	0.61	-	0.48
後9	0.54	-	-	-	0.51
後10	-	0.79	-	-	0.66
後11	0.62	-	-	-	0.62
後12	0.64	-	-	-	0.43
後13	0.41	-	-	-	0.24
説明分散	16.0	13.4	11.4	5.3	

0.39以下の負荷量は省略

表38 後期「CALL英語総合」事後アンケート因子得点比較

	「真剣取組」	「向上感」	「Part2、3、4容易さ」	「Part1容易さ」
OA Av. (SD)	0.05 (0.93)	0.08 (0.88)	-0.12 (0.82)	-0.09 (0.71)
UA Av. (SD)	-0.05 (0.84)	-0.08 (0.88)	0.12 (0.99)	0.08 (0.78)

+ p<.10, *p<.05, **p<.01

「CALL英語総合」クラスの前期受講者については、事前アンケートでは違いがみられなかったが、事後アンケートにおいて、OAがより集中して課題に取り組んだという傾向がみられた。一方、後期受講者については、英語リスニングに対する動機においてOAがやや高いという傾向がみられたが、事後アンケートからは、OAとUAの間に差はみられないという結果となった。

さて、「CALL英語集中」、「CALL英語総合」というように、クラス別にアンケートを分析してきた。「CALL英語集中」においては、受講前に違いはなく、受講中の真剣さがOAとUAを分ける要因になっている可能性が指摘できる。一方、「CALL英語総合」では受講中の真剣さだけでなく、動機づけにおいても違いがみられた。しかし、前期受講者と後期受講者とで結果がかなり異なり、また上で述べたように事前スコアの違いがOAとUAの分類に影響を与えている可能性があることから、「CALL英語総合」受講者におけるOAとUAの違いについては、まだ結論的な答えは出せない。

Ⅳ 全体考察

第1分析と第2分析をあわせ、アンケート分析からわかったOAとUAの違いについてまとめてみよう。まずOAとUAを分ける一つの要因は「動機付け」である。英語学習に対してより高い動機があれば、より大きな学習効果が得られるということである。もう一つは、「受講中の態度」である。より真剣にプログラムに取り組んでいることが、学習効果を上げる鍵となっている。しかし、「真剣に取り組む」ということの中身については、さらに深く調べる必要がある。プログラムに「真剣に取り組む」ということについては、アンケートでは項目3「リスニング課題に対する自分自身の取り組みについてどう思いますか」、項目9「消化することばかりが気になって、リスニングにじっくり取り組めなかったということはありますか」、項目12「提示された問題をいつも集中力をもって聞きましたか」、項目13「問題を解いた後、スクリプト参照ボタンや訳参照ボタンを利用しましたか」が関係している。その中で、前期受講者の分析では項目3、9、12において、後期受講者の分析では項目3においてOAが高い反応

を示していた。また、前期の「CALL英語集中」では項目3、後期「CALL英語集中」では項目9と13においてOAが高い。一方、前期「CALL英語総合」では12においてOAが高かったが、後期「CALL英語総合」ではいずれの項目においても差がみられないという結果であった。

つまり、プログラムに「真剣に取り組んだ」と一口に言っても、集中力をもって一つ一つの課題に取り組んだという場合もあれば、訳参照ボタンやスク립ト参照ボタンを頻繁に利用するなど、丁寧に取り組んだという場合もあることになる。第2節「これまでのOAU研究で明らかになったこと」で述べたように、これまでの受講中データ分析では、課題に対するOAの集中力が、UAに較べて特に高かったのではないかとこの考察を行っている。現在進行中である平成15年度受講データ分析、つまり本研究におけるアンケート回答者の受講中データ分析と併せ、より詳細に「真剣に取り組む」ことの中身を分析していく必要がある。そして、そのことにより、大きな学習効果を上げるOAとそれほど効果を上げることのできないUAを作り出す原因に、さらに深く迫ることができると考える。

V. 今後の課題

まず、アンケート分析結果と受講中データの分析結果をあわせ、より詳細にOAとUAの違いを分析していく。その上で、OAとUAの違いを産み出す原因について仮説を立て、それを検証していくことになる。一つの手段は、OAとUAの違いを検証できるよう、アンケートをより詳細なものにして分析するという方法があるだろう。また、受講中データについても、学習者の反応をより精密に収集し分析することが必要かもしれない。さらに、典型的なOAとUAとを抽出し、彼らにインタビューを実施するなどの方法も考えられる。

リスニングプログラムだけでなく、リーディングプログラムにおけるOAU分析結果とをあわせて、IETWにおいて、より効果の上がる学習者態度や取り組みというものを、明らかにしたいと考えている。

VI. 参考文献

- 青木 信之 (2004) ネットワーク型英語集中訓練プログラムにおけるoverachieverとunderachieverの研究 ―リーディングプログラムの場合― 『中国地区英語教育学会研究紀要』, 第34号, 123-131.
- 青木信之・渡辺智恵 (2000) CALLを利用した英語集中訓練プログラム：その実施と結果の分析. 広島市立大学国際学部『広島国際研究』第6巻, 131-160.
- 青木信之・渡辺智恵 (2002) 日本人大学生のためのCALL利用英語学習プログラムの実施と結果について (その3) : Intensive English Training on the Web 2000. 広島市立大学国際学部『広島国際研究』第8巻, 93-127.
- 青木信之・渡辺智恵 (2004) A Columbus' Egg Idea for English Education Reform: Seeking Effectiveness and Efficiency of University English Education through a Network-based Intensive English Training Program. Lecture delivered at the JALT Hiroshima Chapter Conference.
- 安藤昭一 (1989) やさしい文を速く読む指導. 『英語教育』 大修館, 7月号, 14-15.
- 谷口賢一郎 (1989) 速読指導はどうあるべきか. 『現代英語教育』 研究社, 4月号, 46-49.
- 渡辺智恵 (2003) CALL利用英語集中訓練プログラムの正規英語科目への応用. 広島市立大学国際学部『広島国際研究』第9巻, 129-161.
- 渡辺智恵・青木信之 (2001) 日本人大学生のためのCALL利用英語学習プログラムの実施と結果について : Intensive English Training on the Web (II). 広島市立大学国際学部『広島国際研究』第7巻, 201-250

VII. Appendixes

*実際に実施したアンケートには、リーディングプログラムについての質問なども含まれているが、ここではリスニングプログラムに関する項目だけを整理して記載している。

Appendix 1

1. 受講前アンケート

英語学習に関する必要性等についてお訊ねします。

- 1) 自分自身の学業や仕事に英語はどの程度必要ですか？
 1 必要ない 2 あまり必要ない 3 わからない
 4 やや必要 5 とても必要
- 2) 英語に対する自分自身の学習意欲はどの程度だと思いますか？
 1 強くない 2 あまり強くない 3 わからない
 4 やや強い 5 とても強い

英語に対する興味についてお訊ねします。

- 3) 英語は好きですか？
 1 嫌い 2 やや嫌い 3 どちらでもない
 4 やや好き 5 好き
- 4) 英語を聴くことは好きですか？
 1 嫌い 2 やや嫌い 3 どちらでもない
 4 やや好き 5 好き

英語の学習経験についてお訊ねします。

- 5) 留学経験について教えてください。
 1 ある 2 ない

「1ある」とされた方は、期間や学校など具体的に教えてください
 ()

- 6) 今までに中高及び大学の英語授業以外で、「ラジオ英会話」などで英語を聞く学習をしたことがありますか？
 1 ない 2 ほとんどない 3 どちらでもない
 4 少しある 5 ある

英語の勉強方法についてお訊ねします。

- 7) 自分自身の学習方法は自分が考えるほうですか？
 1 考えない 2 あまり考えない 3 わからない
 4 やや考える 5 とても考える
- 8) 今まで英語の勉強方法に関する本を読んだことがありますか？
 1 読んだことがない 2 ほとんど読んだことがない
 3 どちらでもない 4 少し読んだことがある
 5 よく読んだことがある

- 9) 今まで英語の勉強方法を、4技能(話す、書く、聞く、読む)に分けて考えたことがありますか？
 1 考えたことがない 2 ほとんど考えたことがない
 3 わからない 4 少し考えたことがある
 5 よく考える
- 10) 過去1年間の間に、自分自身のリスニング力が伸びた経験はありますか？
 1 まったくなかった 2 あまりなかった
 3 わからない 4 少しあった 5 とてもあった

Appendix 2

2. 受講後アンケート

- 1) 問題量はどうか？
 1 とても多かった 2 やや多かった 3 適量だった
 4 やや少なかった 5 とても少なかった
- 2) 1日にどのくらいの時間をリスニング学習に費やしましたか？
 1 3時間以上 2 2時間以上 3 2時間以内
 4 1時間程度 5 30分以内
- 3) リスニング課題に対する自分自身の取り組みについてどう思いますか？
 1 とても不真面目 2 やや不真面目
 3 どちらでもない 4 やや真面目 5 とても真面目
- 4) リスニングプログラムはあなたにとって英語力向上に役立ちましたか？
 1 全然役立たなかった 2 あまり役立たなかった
 3 どちらとも言えない 4 少し役立った
 5 とても役立った
- 5) TOEIC形式のPart 1 (写真を見て答える形式)は難しかったですか？
 1 とても難しかった 2 やや難しかった
 3 適当だった 4 やや簡単だった
 5 とても簡単だった
- 6) TOEIC形式のPart 2 (適切な応答を選択する形式)は難しかったですか？
 1 とても難しかった 2 やや難しかった
 3 適当だった 4 やや簡単だった
 5 とても簡単だった

7) TOEIC形式のPart 3 (会話文の形式) は難しかったですか？

- 1 とても難しかった 2 やや難しかった
- 3 適当だった 4 やや簡単だった
- 5 とても簡単だった

8) TOEIC形式のPart 4 (長文の形式) は難しかったですか？

- 1 とても難しかった 2 やや難しかった
- 3 適当だった 4 やや簡単だった
- 5 とても簡単だった

9) 消化することはかりが気になって、リスニングにじっくり取り組めなかったということはありませんか？

- 1 とてもよくあった 2 わりとあった
- 3 どちらとも言えない 4 あまりなかった
- 5 まったくなかった

10) リスニング力が伸びたと感じますか？

- 1 まったく感じない 2 ほとんど感じない
- 3 わからない 4 やや感じる 5 とても感じる

11) リスニングプログラムをまた受講したいですか？

- 1 まったく受講する気はない
- 2 ほとんど受講する気はない 3 わからない
- 4 受講してもよい 5 絶対受講したい

12) 提示された問題をいつも集中力をもって聞きましたか？

- 1 全然集中していなかった
- 2 あまり集中していなかった
- 3 どちらとも言えない 4 わりと集中していた
- 5 とても集中していた

13) 問題を解いた後、スクリプト参照ボタンや訳参照ボタンを利用しましたか？

- 1 全然しなかった 2 あまりしなかった
- 3 どちらとも言えない 4 わりとした
- 5 とてもした